

機関番号：20105

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20592663

研究課題名（和文） 帯状疱疹後神経痛を抱えた高齢者の慢性疼痛との共存の過程

研究課題名（英文） The Process of Elderly Post Herpetic Neuralgia People for Living Life with Chronic Pain

研究代表者

進藤 ゆかり (SHINDO YUKARI)

札幌市立大学・看護学部・助教

研究者番号：70433141

研究成果の概要（和文）：

帯状疱疹後神経痛を持つ高齢者に焦点を当てて、その痛みによる体験や生活への影響の過程を明らかにすることを目的にした。65歳以上の高齢者9名を対象に、半構造化面接を実施し、質的分析を行い、帯状疱疹後神経痛を抱えた高齢者の慢性疼痛との共存の過程について、8つのカテゴリーを抽出した。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this study was to provide a narrative of the daily life of elderly patients aged 65 years and over living at home with post herpetic neuralgia. It identified what big changes and problems persistent pain caused in their daily lives.

The participants were 9 outpatients, who had post herpetic neuralgia. The data were collected by semi-structured interviews, and analyzed using the constant comparative method. Eight common themes were identified which related to the elderly's life with chronic pain.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学 地域・老年看護学

キーワード：看護学、帯状疱疹後神経痛、慢性疼痛、高齢者、痛み

1. 研究開始当初の背景

近年の高齢化の波は全世界の問題となり、老年看護の必要性が社会的要請の緊急課題になっていると同時に、高齢者が老化や病とうまく付き合いながら、在宅で生活していける

ようなケアが求められている。近年ペインクリニックにおいても高齢患者が増加し、特に急性帯状疱疹痛や帯状疱疹後神経痛 (Post Herpetic Neuralgia:以下PHN) に苦しむ高齢者が増加傾向にある。帯状疱疹 (Herpes Zoste

r:以下HZ) は水痘に罹患した者がストレスや加齢に伴い免疫能が低下して発症するが、高齢になるほど罹患率が高く、わが国では年間60~70万人程度発症しており、5~6人に1人は一生の内に一度、罹患すると言われている。わが国のPHN患者数は年間5万例と推測され、大半が高齢者であり、経験した者でなければ理解できないほどの苦痛とQOLの低下が引き起こされる。近年、海外ではいち早くこの実態を憂慮し、高齢者への水痘帯状疱疹ワクチン接種によってHZとPHNの発生率を著明に低下させたという臨床試験が報告された¹⁾。2006年にはアメリカ食品医薬品局が正式に60歳以上の高齢者にHZ予防ワクチンの使用を許可し、国を挙げてHZとPHNの根絶に向けて取り組み始めている。一方、わが国は水痘帯状疱疹ワクチンが未だ任意で約8000円と高額であり、接種者も年間30万人程度と少数で、この疾患への予防的取り組みが消極的である。

PHNに関する研究はこれまで麻酔科皮膚科医による帯状疱疹発生因子の研究や疼痛治療の評価、患者のうつ的な心理傾向を探った研究が主流であり、看護者による研究はほとんどないに等しい。

海外研究では高齢者の痛みは長期化しやすく、社会的、精神的、肉体的活動を抑制し²⁾、高齢者が上手く痛みに対処することができず³⁾、慢性疼痛とうつ病の関連が深いと指摘されている⁴⁾。近年、国内でも在宅高齢者の様々な身体的痛みが彼らの健康感やQOLにどんな影響を及ぼしているかについて、量的研究⁵⁾⁶⁾が見られてきているが、質的に分析し発展させているものは極めて少ない。また、これらの研究は多様な慢性疼痛を持った高齢者全般が対象であり、痛みの原因が様々である。

本研究により、帯状疱疹発症後の急性疼痛から慢性疼痛であるPHNに移行してしまったPHN高齢者の体験を時間経過と共に捉え、質的

に分析することによって、様々に変化するPHN高齢者の不安や苦痛、生活への対処、痛みと共に生きるありようを明確に把握することができるであろう。

2. 研究の目的

著者はこれまで大学病院麻酔科看護師としてPHNに苦しむ慢性疼痛高齢者を看護し、あまりにもこの実態が社会に見過ごされていることに気がついた。そこでPHN男性後期高齢者を対象に、痛みによる問題点や痛みが生活に与えた変化を調査した結果、高齢者は痛みの程度により活力が増減するが、高齢者自身がPHNを根治困難なものと理解することや、家族、友人等の周囲の庇護的な干渉が、彼らの生活の立て直しに良くも悪くも影響を与えていた⁷⁾。また、この研究で対象者全員が帯状疱疹発症初期に適切な治療が受けられなかった、あるいは初期受診が遅れた背景があった。そのため、本研究では、超高齢化社会を迎えた日本において、今後更に増加が懸念されるPHNの予防行動の普及啓発活動と高齢者の慢性疼痛によるうつ傾向や気力の低下等を予防するために、難知性のPHNを抱えた高齢者の痛みの実態や体験及び、その生活への影響の過程を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 研究対象者

対象者は麻酔科外来を有する病院に受診し、HZ発症後3ヶ月以上経過した65歳以上のPHN患者9名に同意を得た。

(2) 研究方法の選択

本研究の目的は、既存の尺度を使用した中からでは見えにくい、帯状疱疹後神経痛を抱えた高齢者の痛みの実態と生活への影響をより具体的に捉えることである。そのため、高齢者一人一人の痛みを抱えた生活の様子を彼ら自身の言葉で、できる限り忠実に記録し、

解釈することを目的とした質的、帰納的研究方法が妥当である。加えて、慢性疼痛高齢者の質的な言語データをありのままに捉え分析することにより、多様な高齢者の個別性を重視したアプローチの方向性が見出せると考えた。

(3) データ収集・分析

方法は、基本属性、帯状疱疹発症年月、部位別痛みの程度はVAS (0~10) を用い、健康に関するQOLについてはShort Form 36(以下SF36)を用いた質問紙調査を実施した。及び半構成的面接法を用いたインタビューを行い、同意を得た上で録音、逐語録を作成し、質的帰納的に分析した。

さらに、半構成的面接法を用いたインタビューを行い、内容は対象者の同意を得た上でテープ録音し、逐語録を作成した。

インタビュー質問内容は「自分の痛みの捉え方」「痛みの発症から今日までの気持ち、日常生活、環境などの変化」「変化の過程に影響したもの、変化の理由」について自由な回答を求め、質的帰納的に分析した。

(4) 倫理的配慮

倫理的配慮として、研究対象者に研究の趣旨、方法、参加は自由意志であり、拒否しても不利益が生じないこと、データの匿名性の確保などを、文書及び口頭で説明し、同意を得た。本研究は、研究者の所属する大学の倫理委員会の承認を得て行った。

4. 研究成果

対象者の平均年齢は75.8(71~82)歳、女性6名、男性3名、発症後経過年数3.4年であった。麻酔科受診理由は第三者の勧めが大半で、高齢者は麻酔科外来自体を知らず、適切なPHN治療の市民への啓蒙の必要性が示唆された(表1)。疼痛スコア(VAS 0-10)は「現在の痛み」平均5.2±2.6、「満足できる痛み」平均1.8±1.3であり、対象者の現在の痛みと希望する痛みの程度とのギャップが少な

いほど痛みを受容していた。

表1 帯状疱疹発症時の状況 n=9 (%)

発症から受診までの日数	当日	4(44)
	翌日	3(33)
	4~5日後	2(22)
初受診した科	内科	4(44)
	皮膚科	4(44)
	整形外科	1(11)
受診前にHZと認知していたか?	はい	3(33)
	いいえ	6(67)
麻酔科を受診した理由	他者からの勧め	4(44)
	病院の紹介	4(44)
	自分で探した	1(11)

SF36 各下位尺度は8尺度全てが年齢層別0-100 得点全国平均値を下回り、特に身体の痛みや日常役割機能(身体)が顕著に低く、痛みの影響が高齢者のQOL全般を著しく低下させていた(表2)。

表2 SF-36 下位尺度得点(0-100点換算)

SF-36 各下位尺度	本研究対象者 平均値 N=9	国内高齢者 70-80 歳 平均値
身体機能	66	71
日常役割機能(身体)	52	75
体の痛み	41	67
全体的健康感	44	59
活力	44	61
社会生活機能	67	84
日常役割機能(精神)	63	77
心の健康	61	74

PHN 高齢者の痛みの体験は、「不確かな病

状の出現」「初期治療への疑心・後悔」「状況打開の試み」「活力・体力の衰退」「痛みにまつわる予期不安」「痛みとの折り合い」「周囲の干渉の兼ね合い」「活きることへの再起」の8カテゴリーに分類された。

対象者は「不確かな病状の出現」に困惑し、「初期治療に疑心・後悔」を感じたまま、痛み緩和のために「状況打開の試み」、「活力・体力の衰退」を自覚して生活していた。

痛みが再燃するかもしれない、悪化するかもしれないという「痛みにまつわる予期不安」を抱えながらも、家族や周囲の擁護的あるいは疎外的、または支持的な「周囲の干渉の兼ね合い」によって、良くも悪くも「痛みとの折り合い」方を見つけ、ただ家の中で寝て起きてご飯を食べるだけの生活から、自分のやりたいこと、興味があること、PHNになる前は行っていたことを少しでも再開しようとするといった、「活きることへの再起」に向かっていた。

また、PHN 高齢者に対するこのような半構成的面接はそれ自体が傾聴となり、高齢者自身が痛みを客観的に見つめ直すのに有用であると考えられる。

[参考文献]

- 1) Oxman MN, Levin Mj, et al: A Vaccine to Prevent Herpes Zoster and Post herpetic Neuralgia in Older Adults. New England Journal of Medicine 352.2271-2284, 2005
- 2) Williamson G.M., Schulz R.: Pain, Activity Restriction, and Symptoms of Depression among Community-Residing Elderly Adults. Journal of Gerontology 47(6):367-372, 1992
- 3) Klinger L., Spaulding S.J., Polatajko H.J., et al: Chronic Pain in the Elderly: Occupational Adaptation as Mean

s of Coping with Osteoarthritis of the Hip and/or Knee. Clinical Journal of Pain 15(4):275-283, 1999

- 4) Ohayon MM, Schatzberg AF.: Using chronic pain to predict depressive morbidity in the general population. Archives of General Psychiatry. 60(1):39-47, 2003
- 5) 木村裕美、小野ミツ、松本昌子:在宅高齢者の身体的痛みの状況とその影響、老年看護35:102-104、2004
- 6) 赤嶺伊都子、新城正紀:地域在住高齢者へのペインマネジメントの導入、沖縄県立看護大学紀要3:25-32、2002
- 7) 進藤ゆかり、皆川智子、住吉蝶子他. PHNを抱えた後期高齢者の生活に関する研究. 札幌医科大学保健医療学部紀要第4号:85-93, 2001

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

○取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

進藤 ゆかり (SHINDO YUKARI)
札幌市立大学・看護学部・助教
研究者番号：70433141

(2) 連携研究者

山内 正憲 (YAMAUCHI MASANORI)
札幌医科大学・麻酔科学講座・講師
研究者番号：00404723